

# ウィーンの風



Japanische Gesellschaft in Österreich

2021年2月

1月25日発行

オーストリア日本人会会報

## セーボーデン市盆栽ミュージアム

セーボーデン市盆栽ミュージアム  
村上 友子

ケルンテン州のミルシュタット湖に面するセーボーデン市は人口約6300人の小さな自治体です。夏は避暑地として冬はスキーやウィンタースポーツ観光でにぎわいます。

ここには、今年創立45周年を迎える盆栽ミュージアムがあります。現在はおよそ3万平方メートルの敷地に施された素晴らしい日本庭園に展示された数々の盆栽を觀賞することができます。私にとっては、約20年前、セーボーデン市を通過中に偶然みかけた、「盆栽ミュージアム、ここから4km」という比較的大きな看板につられてふらっと立ち寄ったのが一番最初のミュージアムとの出会いです。当時は、現在の敷地の約10分の1ほどのスペースで、立派な盆栽が展示されていましたが、まだまだ建設中といった感じでした。



その短い滞在の中でふと目に留まったものがありました。青い石の灯籠です。なんとその石の灯籠は、四国は伊予の青石で、愛媛県西条市からやってきたものでした。私は西条市出身なので、なんとも不思議な縁を感じたのを覚えています。それ以来、私は盆栽ミュージアムで働いています。

盆栽ミュージアムは、これまで、なぜ博物館なのか？盆栽庭園や盆栽パークというほうがふさわしいのではないかと度々ご意見を頂戴してきましたが、そこにはギンタークレシュ館長の強い意志があります。

盆栽は、人の手なしでは生きられません。鉢にずっと座った木は、自ら水分補給することが不可能です。水を与えられることで生き延びることができるのです。盆栽ミュージアムに既存の盆栽は、日本からやってきたものが主です。樹齢100年以上のものもあるでしょう。100年という歳月で何人も人の手にかかり災害を経験し、春夏秋冬を何度となく生き抜いて、朽ちかけたこともあったかもしれません。自然に学ぶことは多く、盆栽も思い通りにいかないことがたくさんあり、それは人間の一生と似ているような気がします。

館長の説く盆栽哲学に人々は魅了されます。私もそのうちのひとりで、日本人ながら改めて盆栽は素晴らしい伝統文化だと思いました。正解や終わりのないものを育てるのは、相当の覚悟と忍耐力を要します。だからこそ樹齢100年もの盆栽を手掛けることは、尊敬の意がなければ不可能に近いことなのです。盆栽は人間よりも長生きすることができますが、技術や知識の継承なくては決して達せはしません。盆栽ミュージアムは、敬意をもって後世にしっかりと伝えていく過程を担っているという意味では、歴史や背景を持った盆栽は、まさに持続可能な生きた博物館なのです。機会があれば、ぜひ訪れていただきたいと思います。館長自らのミュージアム案内は、ユーモアを交えながらとてもわかりやすく興味をもっていただけるとと思います。(2ページ目に続く)

セーボーデン市と西条市の友好提携は、こうして青石から始まり、たくさんの偶然の繋がりが度重なって叶うことになりました。人と人とのつながりを大切にして、これからも盆栽文化だけではなく日本文化をここから発信していきたいと思っています。

私は、おそらく日本人以外の人から盆栽の歴史を教わった数少ない日本人だと思っているのですが、ここに来なければ私は日本の誇りでもある伝統文化を正確に説明することもできなかったでしょう。

セーボーデン市と西条市の友好都市提携の際に、同時に「湖山会(こさんかい)」という協会を立ち上げました。それぞれの象徴であるミルシュタット湖と石鎚山から命名しましたが、これからも日本とオーストリアの国際交流の橋立となれるように盆栽ミュージアムから日本について発信し続けていきたいと思っています。

盆栽ミュージアム(<http://www.bonsai.at/>)は、四季によって違った顔を持ち、特に4月下旬から5月は、リンゴやツツジや皐月の花が見頃で、お花見を楽しむことができます。

